大正十三年十一月二十二日第三種郵便物認可
大正十四年四月三十日印刷納本・大正十四年五月一日發行

婦人と労働

五月號



職業婦人社發行

第三卷第四號

婦人と勞働

十五年四月號



メーデー來る！

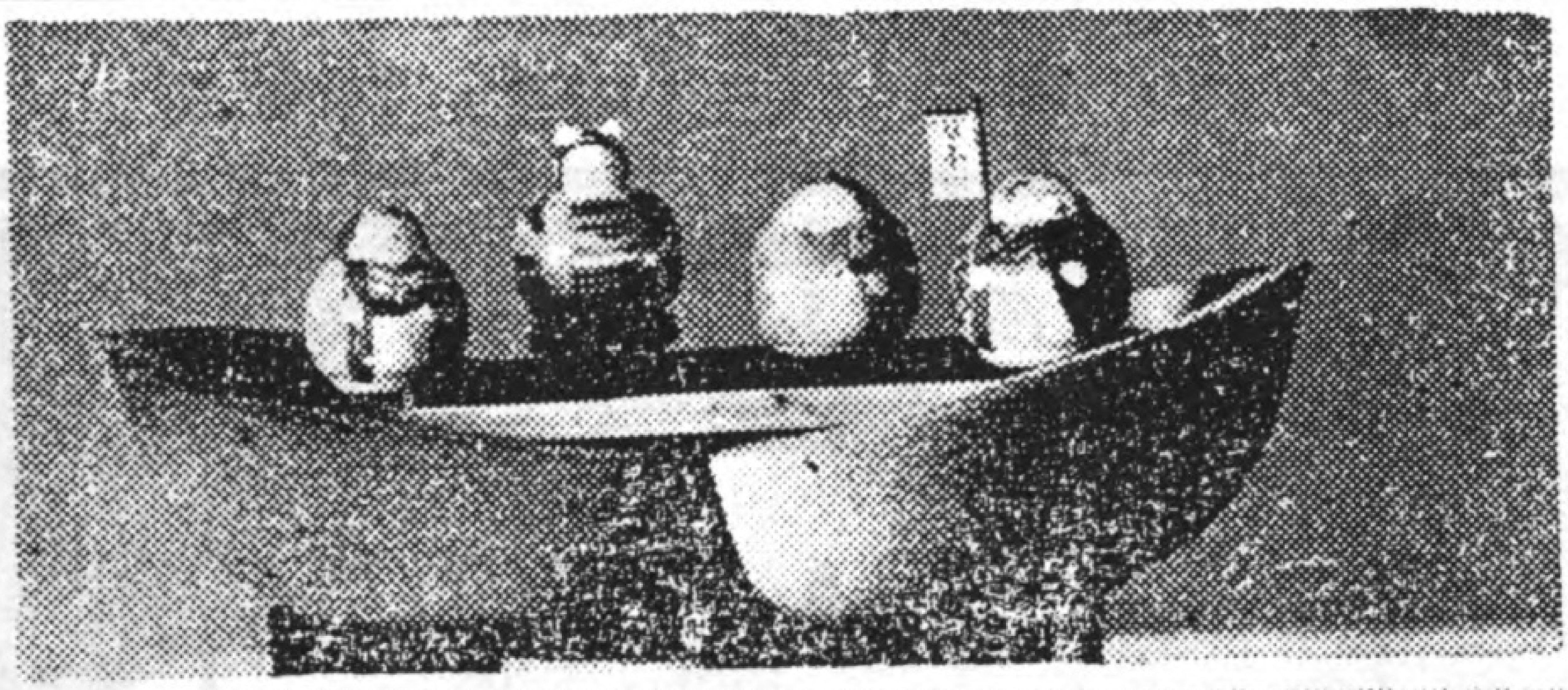
メーデー(勞働祭)來る。

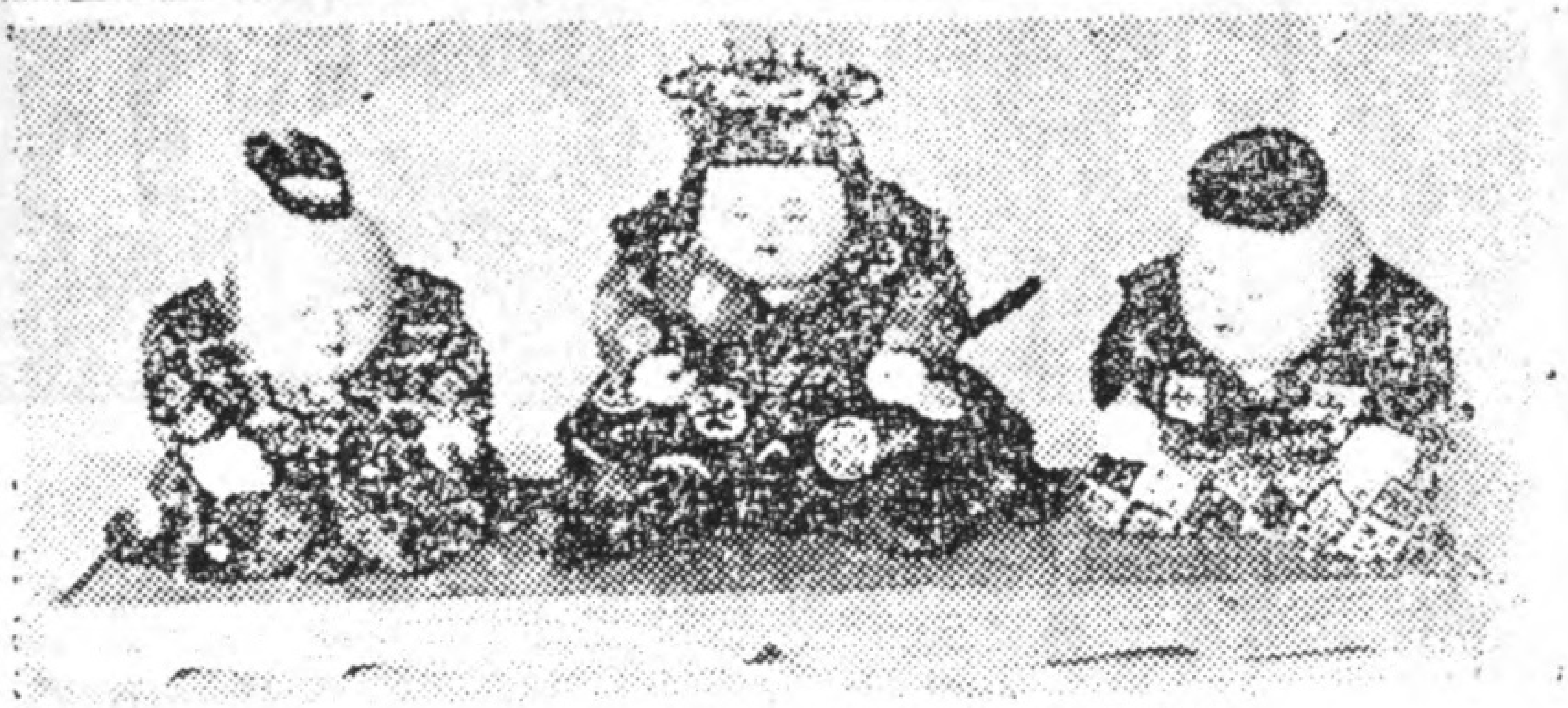
この日、世界ぢうの勞働者が一サイに、その仕事の手を休めて、バンコク勞働者の國際的同胞主義と階級的一致をあらはすために總動員を行ふのであります。わがH本でも、毎年、東京大阪、八幡などはいふまでもなく、各地で、勞働者のさかんな示威行列が行はれます。

×

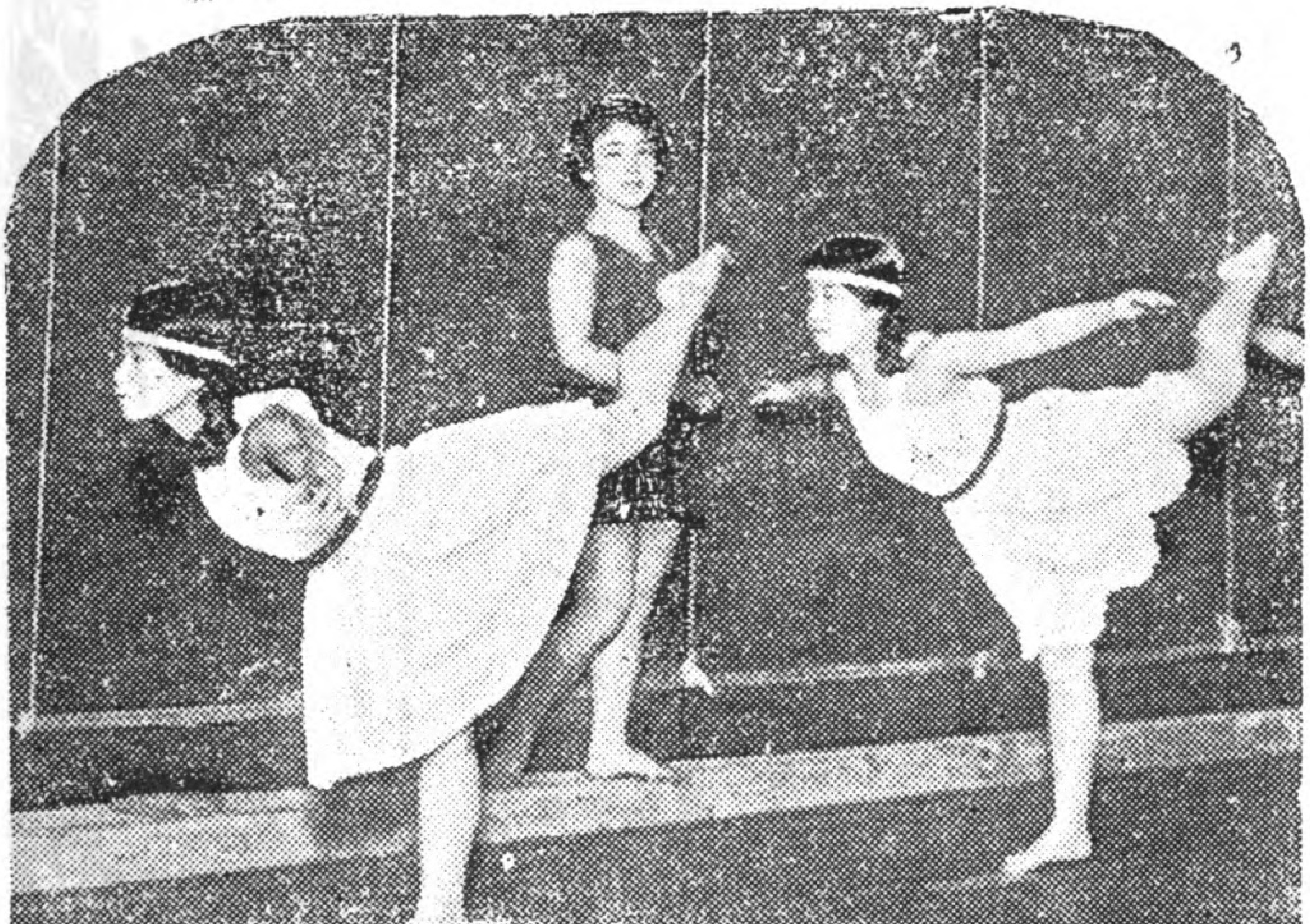
全ての勞働者が一致してその仕事の手を休めたとき、全社會は死んだやうに靜かになつて、一切の産業、一切の交通、一切の通信はぴつたり留つてしまふでせう。このとき初めて人々は今まで社會のすべての原動力となつて働いてゐた者が、實に勞働者であつたといふことに氣がつくに違ひありません。

もし今、こゝですべての女が申し合せて、一サイにその働きの手を休んだらどうでせう。考へてみるのに、社會は、なほあまりに女の働きの重要さを忘れ勝ちです。母として、主婦としての働きは云ふまでもなく、女教師、店員、看護婦、女工、保姆、その他職業婦人として、キンベンに働いてゐる三千萬の婦人全体が、今こそ、この五月一日の勞働祭を祝ふて、自分たちの働きに對して、社會が正しい地位と尊敬と、庇護とをおくやうにつとめなければなりません。

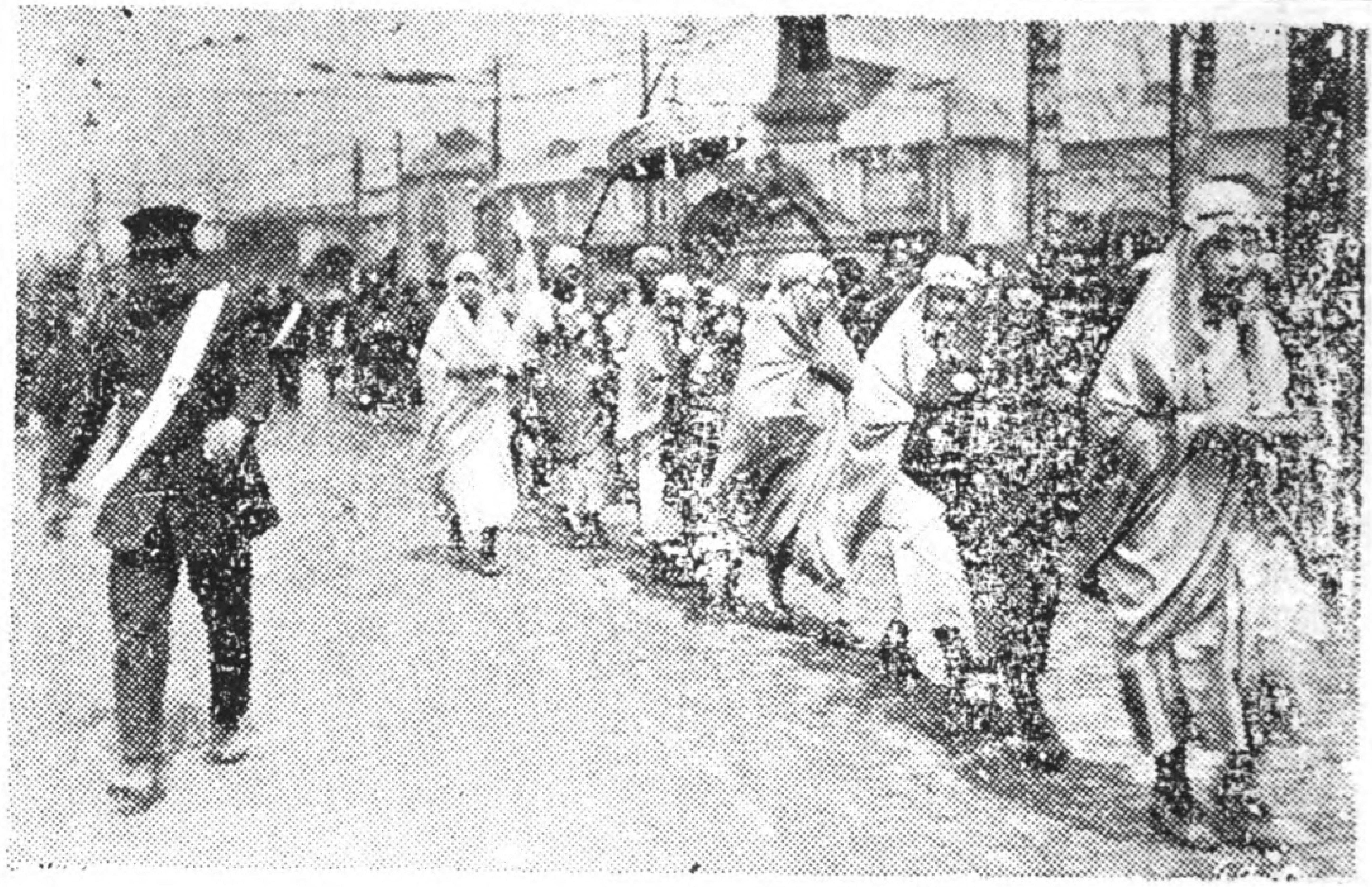




◆新趣向の五月人形



◆九頭龍園のリズム体操



◆四月八日の花祭り　印度風俗で市中な練り歩く圖



◆三曲合奏のラジオ放送圖

女教員大會に際して

奥むめお





今年の議題に就いて

まい年開かれる全國女教員會の第五回が、本年も五月二十一日からお茶の水で開かれることになりました。今年の議題の中に、

女教員の家庭生活を簡易にするに就て、

といふ一項がありますが、これは重大な問題ですわが國の職業婦人の大多數はまだ結婚前の若いむすめたちであるのに、女教員だけは、半分以上すなはち十人の内七人までが既婚の婦人——云ふと

ころの家持ちの女であります。職業と家庭とのもつれからくるいろんな悩みを、一番多くの人が切實に感じさせられてゐる職業として、女教員がこの問題の前に。いつはらず飾らぬ自分たちの生活狀態を持出して、問題の解決をどこに探しあてるか、とにかくつきとめる處までつきとめてみるべきであります。

云ふまでもないことではありますが、かういふ問題は、たゞ問題それ自身として、みんなで申合せをしたり、……せんことを期す、なんて決議したりしたところで、それが女教員の實際生活の上に何のたしにもならないのです。要は、現在のこの、職業のためにうけなければならぬ家庭のいろ〳〵な犧牲、又家庭をもつてゐる事のために忍ばねばならぬ多くの職業上のつらさ、苦しさ、これらを、どうとり除いてゆくかにあるのであります

女教員と外の職業婦人

東京市社會局が都下の職業婦人に就いていろいろ調査をした中で、職業婦人の閑散時の使ひ方に就いて、事務員やタイピストや看護婦や交換手などが、みんな、洗濯、讀書、女藝のおけいこ、家事の手傳ひといふ風なことを書いてゐるのに、女教員だけは、

家政の整理、子供をつれて散歩、親戚訪問、といふ風な事を大部分の人が書き答へてゐます。又趣味、愉快なこと、好きなことゝいふのに、

一、一家無病で良人や子供がきげんよく打ち揃つた土曜日の晩

一、歸宅の際子供の嬉しさうな笑顔をみる時

一、良人と同伴で散歩をする時

一、家の中が整理出來たとき

一、一家團欒

といふ風のが大多數ですが、これを外の職業婦人たちの、活動見物、讀書、聲樂、寢ること、眠想、着物を買ふこと、など い のと、何といふ大きな相違でせう。如何に職業婦人としての女教員の生活の中心が、その家庭に、その家族の上におかれてゐるかといふことがわかります。

　これに就いて考へられることは、女はみなそうであるのですが、既婚の職 婦人としての女教員たちは、あまりに與へられたその環境に、がまん強くありすぎることです。

　一人前の職業婦人として、教壇に立つて男教師なみに一日分の仕事をし終へて家に歸つてから、それから更に、母として、主婦としての一日分の仕事をしなければならないのです。否、外の、たゞ一日中を家事に沒頭してゐる婦人たちと同じやうに、夕飯の遲くなるのを恐れ、洗濯物がたまることを苦にして、飛ぶやうにして、家に走つて歸るのです。その間に、一日中母の留守を待つてゐた小供たちは、右から左からまとひついてくるでせう。職業上にも、家庭をも てゐるのだから、子供があるのだからといつて與へられる好意や便宜やの代りに、つらさや不便やを忍ばねばならぬ事が多すぎます。

　かうして、女は、働きつゝ——否々、二人分三人分を働きつゝ、餘計に働く者ほど一層卑屈に、一層無力に、一層みぢめになつて、我と我が心身を削るやうな生活をつゞけてゐるのです。働く者の權利なんて、大多數の働いてゐる婦人にとつてどこを吹く風でせう。

もつと自發的にせよ

　尙、女教員大會が毎年行はれて、全國から數百人の女教員が集つて、議題を討議したり、いろい

ろその感想を叩き合つてゐるとは云ふものゝ、その代表者は女教員自身が選擧したものではなく、大多數は上から指名された代表者であり、議題に對しても、何ら重要な下相談をするでなく、たゞ漫然と集つて、漫然と討論し、漫然と散會して、その間何らの統一も聯絡もないやうな——從て、大會で討議し決定したことも、責任を以つてこれを實行するものはない——現在のやうなことでは如何に女教員大會で、切實な重要な問題が、毎年議題に上るとしても、要するに其れは大事な時間と汽車賃かけての机上の空論にしかすぎません。

女教員の組合運動へ

それには、眞に女教員自身が、その要求から自發的に集つて、女教員としての共通の問題の上にかたく〳〵結束して、その地位の改善、權利の獲得を圖る爲に、徹底的にたゝかふのでなくてはなりません。英國の女教員の間には、近頃、男女平等の待遇といふことが問題になつてゐますが、彼女らは、女教員國民同盟を作つて、非常な勢ひで今、教員俸給調査委員會を、男女委員同數で組織すること、同一職務に從事する教員は、男女に依つて待遇の差別があつてはならないこと、について、事あるごとに、政府に對し、社會に對して、その要求を訴へて貫徹を圖つてゐます。

ことし第五回を迎へ樣としてゐるわが女教員會も、この際、平素から女教員同志の聯絡結合の機關となるべき、一つの女教員自身に依る健實な組織をもつやうに努力せられたいものであります。

普選と眞の婦選

今野賢三

——さん。

しばらく北國の田舍の、つまり雪に埋れてゐる私は、東都(みやこ)の陽春(はる)の匂やかさを新聞に見ても、どこかの夢の話を聽かされてなんの感興も湧かない鈍感そのもの〻やうに、あまりにも彈力の弱くなつてゐる自分が感じられます。それだから、中央におこるいろ〳〵な出來ごとに對して、私のうける刺戟より、また批判のひらめきなども、ひとりでに潑溂味を缺き鮮明を缺きやすいのですが、また、ねばりづよく一つのことを考へ得られる點においては、都會生活をしてゐたときの自分とまつたく違ひます。

さて、此のやうな前提(まへおき)をもち出したのは、今、私が、『婦選運動』を遲れ走せに一言いはふとしての、實は辯解にほかならないのです。政治期もとつくに流れ去つて、人は花に醉ひ、初夏を迎へる準備にいそがわしいとき、『婦選』でもないじやないかと、笑はれはしないかと思つて……

——さん。

既成政治屋(きせいせいぢや)たちが、後生大事にかつぎまわつた普選なるものも、支配階級の征服慾と、自己存在の保全慾とからさしのべられた白い手に、思ひきりもてあそばれたあげく、すつかりその處女性を傷付けられて、見るかげもないすがたを、無關心であつた民衆の幾分へ、『ありがたく頂戴しろ』と

なげつけられました。それで、無關心から關心へと、止むを得ず民衆も心をうつさなければならなくなりました。ところが、それは片手で菓子をあたへて、その餌に釣り寄せておいて、實は片手で『治安法案』といふこぶしを、したゝか見舞つた欺瞞は見え透くのでしたが、これまた泣寢入りになるべく餘儀なくされて了ひました。

とにかく、『普選をありがたく頂戴しろ』といふことは、骨身を打くだく鉄拳の報酬を覺悟しろ！といふ凄文句だつたのですね。これで民衆が憤激と壓抑に窒息の思ひをしずにゐられませうか。ところで今となれば、その欺瞞にひつかゝつた無念の齒がみをしながらも、そのなげあたへられた普選の一すぢのつなに、不精〳〵とりすがるか、思ひきりやけくそになつて、なにもかもぶちこわしにかゝるか、二つよりみちがなくなりました。けれども私たちは、やけくそになつて、すてばちな生きかたも出來ないのですから、涙を呑みながらも、普選のつなを片手に握つて、先づ手はじめに『無產政黨』の組織からはじめて持久戰にとりかゝるより仕方がないでせう。

――さん。

いそがしい私の、ペンが思はずほかへ反れて了ひました。かんじんな「婦選」のことを、ちよつとより言へなくなりました。おゆるし下さい。

現在の一般女性について、それがめぐまれたブルジョア生活者をのぞけば、その生活の實体を觀察するとき、なにより先づ第一義として感じることは、その、一個の人間としての生存權が、まつたく認められてもゐなければ、確保もされてゐないといふ事實、その家庭生活において、その親子の關係において、社會生活において、實證され

てゐることを誰しも否定し得ないでありませう。

現在の社會においてなされなければならない婦人解放運動とは、「生存權の確立」であることを、私がこと新しく申上げなくても、貴女たちにとつてはあまりにもわかりきつたことがらであるに違ひありません。けれども、私が强ひて、これを第一義として婦選運動と結びつけずにゐられないのは「無產階級的立場」を根底とするからであります

無產生活の立場から、女性の生存權の確立を考へると、それはあまりにも悲慘な實狀が、現實に展開し過ぎてゐるではありませんか。

現在の結婚の大多數が、獨立して生きてゆけないところから來る、「止むを得ぬ身賣り」でないとどうして言はれませう。性の破壞、性の蹂躙、性の提供——その大部分は、女性自身が、生きる力を否定され、否認されてるところからくる、わづかにあたへられた生存の手段ではないと如何うして言はれませう。女性が生きてゆかうとすることは、男性の力にすがることであり、手賴ることであり、その分け前をあたへて貰ふことだといふ因襲觀念は何を語るでせう。男性が今なほかつ、女性を奴隷視することをやめないのはなんのためでせう。貴女たちが唱へるところの母性の保護を、男性があまりかへりみないのはなんのためでせうそれは、男性が、一個の人間としての女性の生存權を認めてゐないところからくるのではないでせうか。

——さん。

女子參政權の運動が、單なる政治趣味の、遊戯心理から生れたものか、たとしまた、既成政治屋が普選を要求したと同じやうに、「單なる參政權」の要求であつてならないことは言ふまでもないが

その根本の目的を、今申上げた『無産生活から叫ばれる生存權の確立』において、政治的に、努力してゆかうとするところに、はじめて、女性の切實な大問題として、團結から團結へと、眞劍な運動の波浪をつくることが出來るのではないでせうか。

私は、如上の意味の『婦選運動』の起ることを、痛烈な要求として貴女に申上げずにゐられません

そして、私のいふ意味の婦選運動こそは、男性の無産政黨運動と、共同戰線を張り得る當然なものであります。なぜなれば、生存權の確立とは、組織環境の變改に依らなければ、達成することが出來ないからであります。

——さん。

北國は四月はじめといふに、今日もまた、春をチラリと匂はせただけで雪模樣です。そのせゐでもあるまいが、こんなへんなものを書いて了ひました、あしからず。

（四月五日）

産みたい時にだけ産む

堺　利　彦

貧乏人の子澤山といふ諺がある。この諺には何となく、子を澤山こしらへた人を嘲笑ふ語氣が含まれてゐる。子を澤山産む事は、果して恥であらうか。

或經濟學者はこんな事を云ふ。人間に貧乏といふことのあるのは、畢竟、食物が不足するからだ

文明の進歩とともに食物を產出する力も大いに增加するが、人口の增加はそれよりも一層割合が多い。そこで貧乏を救濟するには、人がめい〳〵節制して、あまり多く子を產まないやうにするより外はない。

此の說によれば、貧乏人の子澤山は、不節制、不謹愼の結果として嘲笑をうくべき理由があるやうに思はれる。すなはち、彼等の貧乏は自業自得であるばかりでなく、さらに社會に對して迷惑と損害とを掛けるわけである。(彼は社會に對してこれを恥ぢ、之を謝すべき筈である)

若し此の說が正しいとすれば、人は男女とも、成るべくおそく結婚して、なるべく子を產まないやうにするのが自分のためでもあり、社會のためでもあり、つまりそれが道德に合した行ひになるわけである。

然し、性慾といふものは中々抑制することの出來ないもので、わざと結婚を晩くするのは非常の難事であるから、それよりは避姙法の普及を計る方が容易でもあり、効果も多いといふ說がある。如何にもそう聞いて見ると、避姙の智識と方法とを多數の人に知らせさへすれば、貧乏人の子澤山といふ事實も無くなり、社會は何の困難もなく無事に發達して行くかのやうにも考へられる。

×

ところが、此の說のとなへられた結果であるかそれとも生活の困難に迫られて自然に氣がついて來たのか、兎にかく近來では、避姙が餘ほど多く流行してゐるらしい。殊に中流以上の目の覺めかけた婦人の中には、子を澤山產んで貧乏苦勞をするのは馬鹿々々しいといふ考へが、大ぶん盛んに起りかけてゐるらしい。

そこで今度はまた、こういふ說が出て來た。姙娠分娩は婦人の天職である。婦人がこの天職を怠れば人間の種が絶える。婦人が子を産むことを厭がる樣な思想は、實に不健全な危險思想であると（そして此の說を唱へる人も、前の節制說を唱へた人も、 抵おなじやうな學者先生である）

サアこうなつて見ると、貧乏人はまごついてしまふ、子を澤山産むから貧乏するのだ。お前達の貧乏は自業自得だとお叱りをうけるから、成程そうだと思うて、成るべく子を産まないことにしようとすれば、今度はまた、子を産まないのは不道德だとお叱りを受ける。一体どちらの說に從へばい丶のか。

そこで私は結局こう考へる。今の世の中には多數の貧乏人があるが、政府も金持も一々それを救濟することが出來ない。そこに貧乏自業自得說が出た。此の說さへ聲高く唱へられてゐれば、政府や金持の責任は解除されるわけである。そこでこの說が大いに歡迎された。

×

然し此の說は、貧乏な人を救濟しない政府や金持の言譯のためにのみ必要なのだから、それが實行に現はれては大いに困る。多數の貧乏人を見て知らん顏をしてゐると云はれる事はつらいけれども、しかし實際には、多數の貧乏人が必要である賃金の安い勞働者も必要である。戰爭の爲には××も必要である。そこで避姙不道德說が出て來るこの二つの說は全く反對してゐるやうだけれども實はどちらも政府なり金持なりに都合のよい說である。（同じ樣な學者先生が同じ樣な顏をして、この反對した二の說を唱へるに不思議はない）そこで學者先生の注文に從へば、結局、貧乏人は子供

を澤山産んで益々貧乏して、そしてそれを自棄自得とあきらめて、少しも不平を云はないのが一番いゝといふことになる。

然し私は、貧乏人（殊に婦人）に代つて云ひたい我々は産みたくない時には産まない。産みたい時にだけ産む。そして産む以上、若し　會がその子を必要だと思ふなら、相當の保護をして呉れるが當然だ。

戀

竹村　浩

科學よ
そんな陰の方へかくれないで
男と女の性のまん中へあぐらをかけ
でないと、あの女クリスチャンみたいな
粘着た戀といふしやれ者が
生白い顔をしてやつてくるからな
嘘つき

機械の娘

春めいて
夕空は花束のやうに
雜木林の上に紅い
丘は製糸工場の燈が輝やく
娘は機械に咲く青白い花だ

十三時間の　事を終へた夕暮
大根干のお汁のつまつた腹で
窓に口笛を吹く娘がある
村の人は工　へ勤めることを
『機機に行く』といふ

春めいて
娘の血も赤く湧く
窓から暗い世界に口笛をふく
もう星が出てゐる。

わが職業生活に見出す 喜び、不安 憤り、面白さ

長野 熊谷みすら

(一) 喜び――私は數年このかた工場生活をつづけてゐますが、いまは昔と違つて、製糸工場の制度が改善せられ、家庭にゐては名士の話などろくに聞かれないのに、工場にゐると度々講演會が催されて修養が出來ること。又、私たちの勤めてゐる工場は、産業組合法に依る組合製糸場ですから工場の休みの時は家庭へ歸つて、一生けんめいに養蠶をし、その繭を私たちの手で糸にするのですから非常に愉快です。なほ家庭と組合とは密接的經濟的に一丸となつてゐるから、私たちが働けば、組合も家庭も繁榮する一助となるのだし、又、國家の重要な産業の生糸の生産にたづさはつてゐるのだと思ふと、ほんとうの喜びと趣味とがひとりでに湧いて來ます。

(二) 不安――工場の仕事は永く時間の長いのと、競爭のはげしいのと、運動不足のためにからだが弱くなる恐れがあります。お互ひに女工たちの競爭の形をしてゐることゝ、多勢の中にはよくない人も少くないので、精神が非常に不純になる點があります。又、私たちの仕事は賃銀をきめるのに賞罰をいれてゐますが、それが、自分も承知でした事ではなくて原料、乾繭、煮繭の關係や、指導員の誤りなどから技術上の不出來になつたのでも、私たちが獨りでその罪を着なくてはならないことから受ける不安、家庭にゐるのとは違つて、社會の事をしらないでしまつて遅れがちですから、今少し工場の經營者たちは、私たちの人格向上のために力を注いでほしいものです。

(三) 憤り――私たちの生活は指導員の前に絶對服從ですから、人格者のする事なら無理な事もないが、中には隨分と理解なく、不當な壓迫を加へる人も多いので、時々腹が立ちます。

(四) 面白さ――かく別面白いことゝとして書くほどのものはありません。要するに個人や株式の製糸とは違つて、組合は自分のものと考へられますから、趣味をもつことが出來ます。貯金なども出來ますから、心がけておけば縁附く時などに親に一々心配をかけなくてもよろしい。

私たちは他のことは知りませんが、今の生活からの經驗に依つて、いろ〳〵の不安事があることは、益々改良して貰はなくてはならないし、私たち自身もよく考へて不安をとり除き幸福を招來するやうに自分を修養しなくてはならぬと思つて

ゐます。

或る女敎師の憤り

大分〇生

彼女は 師であ た。大正十一年三月田舍の女學校を出た彼女は、さまざまの希望を胸に秘めて、いそ〳〵と 舍への歩みを初めたが、卒業後の淋しさは例えられないも だつた。で、人の勸めに依つて、最も神聖なと云はれる小學校の女敎師をえらんで就職する事になつた。けれど、敎師といふものにまるで經驗のない彼女は 常に校長からひどい注意をうけた。注意といふよりは、叱られるといつた方が適當だと思はれるやうなことを

けれど彼女は、いつも自分が惡いからだとあきらめてゐたが、一學期二學期とすぎても、子供の手を引いて いけないとか、あまり子供らしすぎるとか、小言は始終絶えなかつた。實際彼女は、その頃は老茶の袴を短くはいて、十五分の休み時間にも、兒童と一緒に鬼ごつこ、テニス等をさかんにや た。彼女の性質として煙草なんかスパ〳〵ふかしてゐる者を 手にしてゐるより、子供相手の方がどれ位樂しかつたか知れない。かく、小さな事 まで小言を云はれては とても堪らない、と悲觀して、幾度辭表をふところにし 學校 出たか知れないでも、門を入つて『先生』と聲をかけて纏つて來る敎へ子をみると、す かりそれらを忘れて、あんなに纏つて來る子供等を棄ててゆけるものか、と思ひ、ひどくいはるればそれだけ子供等が可愛くなつて來。子供等も一層なついて來た。かうして彼女は、壓迫の一年を、無邪氣なエンゼルのやうな子供に依つて慰められてゐた。

翌年 五月、遠足で近所の岡に上る事になつた。この日は丁度、他の女敎員は病氣缺勤をしてゐた。上りついて晝飯を終へ、三時間ほど遊んでから子供たちを先に歸へし、 師は圓座して盃を交し初めた。そし 女敎員 噂に花が咲き あとには聞くに堪えないやうな話を、つぎ〳〵と云ひ合つて、大きな口を開けてワツ〳〵はしやい ゐた。彼女は、あまり女を馬鹿にしてゐる」と 立たしく、又一面には、いい年をし乍ら、あんな話に興をもつてゐる彼等が可哀 にも思へてそつと座を立ち、向ふ側 木の下でスケツチ等して五時頃一緒に引上げた。

すると、程近い敎師の宅に立寄る事になつた。彼女は『私は、おそくなりますからもうここから歸ります と云つたが校長から『私や、年寄の先生を捨 て歸りますか』と言はれて見ると『醉ひどれのお供をするため 私ぢやない』と、心の中では叫んでも、後からついてゆくより外なかつた。ここでも彼 は散々 酒をあほり、お暇をした は薄暗い夕闇がからだを包む頃だつた。一二丁 ごゆき分れ道の處で、他の先生は南い方へ、校

長さ彼女さ老先生さは東方へ歸る事になつた。この時、老先生は、『忘れものをしたから、ちよつさ引返して來る』さ言つて、あたふたさ驅け出した。

『ぢや、私はここで待つてゐませう』さ私は言つたが、老先生の姿が見えなくなると、『先きにぼつ／＼歸ろうぢやないか、あとから、追ひつくさ』と云つたが、恩師の事でもあり、又老体のことでもあるので、『もうすぐ戻つて來られるでせうから待ちませう』と、幾度も問答してゐる内に彼はとう／＼怒り出した。『まるで人を子供かなぞいやうに』と、反抗心を抱き乍らも、不安の氣持で彼のあと ついて行つた。やがて人家を遠ざかると、彼は振かへつて色々と甘言を云ひかけるのだつた。

前から怪しいと思つてゐた彼女は、せゝら笑つてゐた。すると彼 途に、肩に手をかけて色々なことを迫りかけた。『いよ／＼正体を表はしたな』と思つて『何です、肩に手をかけるなんかよして下さい』と、振切つて彼の顔をみつめた。彼は、知らぬ顔でスッ／＼と歩きつづけてゐた。暫くすると又、彼は振返つて手を握り、『僕の言に從ひなさい。でないと又明日からら叱れますよ』と、暴力を以て彼女にかゝつて來た。この一言、『明日から叱られますよ』は、彼女にピクリと來た。そして興奮の絶頂に達した。

『肉喰鳥、死んでも從ふものか』と滿身の力で抵抗し、手を振拂つて云つた。『叱られる位が何です』……『このために叱られる位なら、喜んでうけます』『女學校で、四年間修身を學んだ私です、――これが女教師を守るべき貴 としての態度でせうか』

彼女はこゝまで云つて、強いて落付かうとしたが、やはり 膝は く波打つた二人は無言でゐたが、暫くして、『ほんとにはえらい所がある。なに、一寸試してみただけだ』

『さうですか、ほんとに女てものは哀れなものです』

彼女は其時考へた。これで五月の初めから態度が一變して優しくなつたわけが分つた。このやうに地位と肩書きの下に世の男子は如何に弱い女性の幾人から、處女の誇りをうばいとつてゐるか分らない。而も教育者が、部下の女を、地位を以て弄ぶなどとは、あまりに人を侮辱した行ひではないか。

又女子の中にも、愚かな考へで、後が恐ろしいからとか、俸給を上げて貰へなかつたら、などゝの考で、その言に從ひ女として一番に大切な處女を捨てるものがあるさうであるが、あまりに情ないことだ。自分たちはも と自重して、こんな男子をまじめにさせたい。

それから後、彼女は學校に出ても、彼の姿をみると反抗的な感じがしてならない。小言は以前と少しも變らないけれどそれを氣にもせずに、無邪氣な子供たち

に慰められつゝ、割合に元氣に働くことが出來てゐる。

東京　吉田豐子

　私は一勞働婦人として、朝早くから夜遲く迄職業に從事してゐます。誰しも勞働そのものはいやなものであります。けれども其れは私達が生きて行く上に於て是非共、必要なものである事を知つた今日では、生れた時から義務的に負つて來たものと思つてます。

　一つの職業に從事して、自分の力に依つて得た賃金に依つて自分の生活費、又は自分の買たいものを買はれるその嬉しさ、貴とさは云ふにいはれません。一月働いて得た何幾かの賃金を持つて歸つて母に渡した時の母の嬉しさうな顏を眺めた時に云ひ知れぬ嬉しさと誇りとを感じます。それに依つて毎日毎日の勞働も何時か忘れます。たゞ憤りを感じますことは、同じ勞働に從事してゐる男子から云ひ知れぬ侮辱を與へられることであります。彼等は如何なる意味に於て私達を侮辱するのだろうか、少し上に立つ役の方などは實に甚だしいものです。言葉、態度總てに於てまるで自分の所の女中でも使つてゐるやうな風があります。是れも皆社會の不合理な組織から來るのだと信じます。

　こうした惱みがなかつたならばどんなに正しい生存が出來る事でせう。何時になつたらこの不合理なこの社會から離れることが出來ることでせう。

東京　日　子

喜び——不自由な家庭から解放され、自由な天地に希望の職を得て、自己自身で獨立生計し、專ら婦人の爲めに解放運動に、參政運動に、研究努力してゐる私は、感謝と喜びに滿ちた月日を送つてゐることを最も大なる喜びと思つて感謝してをります。

不安——健康を損ねること。

憤り——一般の男子は婦人の向上と云ふ事に期待及喜望を持たず却つて新らしい希望に燃えてゐる所の女子を中傷し嘲笑し、凡ゆる手段の下にその向上の途を阻害せんとして居る事を憤らずには居られないのであります。

面白さ——大なる煩ひもなく、惱みもなく、希望に向つて勉學研究し得られる氣樂な獨身婦人の愉快さ、面白さ、氣樂さは筆紙に表はせないと思ひます。

母のうたへる

中河幹子

買ひてよとつねねだる子のさびしげに見ては過ぎたりおもちややの前を

母の財布いかにありともひたすらに幼きものはねだれよと思ふ

女の童よちよち歩く紅の下駄をはかせて母もうれしき

汝のさめぬうちより今朝はいでしかば一日足らはず思ひ過しけり（出勤

勤めをへて歸る吾をまち夕ぐれの寒けきなかにゐたりわが子は

夕ぐれの寒けき門に待ちつくし居りけむ子らの手をひきかへる

夕ぐれは疲れて歸り二人子の輝かし顔みるにうれしき

ある朝はいでゆくことにあきらめてあとを追はざるなほし淋しも

泣きてかへる兒が悲しさに觸れてやる丹の頰はぬれて冷かりつも

自動車のゆきすぐるさへにわが家はいたく搖るるも小さきわが家

断片二つ

平田のぶ

武装解除

何處のお家でも、大概一人は恐い人がある樣です。
『そらお父さんがお歸りだよ』
といへば泣く子も默り、
『お母さんに云ひ付けるよ』
といへば、惡戯も止めるといふ風に。
又、家によつては、
『お灸が出るよ』
『押入れに投り込まふか』
といふ樣な、手輕な武器もある樣です。

恐しいものを外に求める世界では、それも仕方のない事でせうが、少なくとも内に見出さうとする人々の生活には、武裝や武器は不必要だと思ひます。

實際大人のかうした武裝や武器に對しては、子供も、『泣く』『喚く』『強情張』の武器で逆襲するか『阿諛』『追從』で、巧みに防禦するではありませんか。

エレンカイ女史は、

『嘘を吐いて打たれたからとて、その爲めに正直を愛する樣にはならぬ』

といつてゐます。

強迫や威嚇は、道德の冒瀆であります。

ある日の日誌

今日はKちやんのお誕生日だといふので、もう一週間も前から、子供達は御案内を受けてゐました

みんなは、毎日今日を樂んで居りました。

『十一時からよ。あんまり早くゐらつしやると、ママがおすしやいろんなご馳走が出來ないでせう。だから十一時からよ』

昨日のおひるに、朝から行き度いといふ子供達にKちやんがさういつて辭わつてゐました

日和の樣にと祈つてゐましたが、朝から、シトシトと小雨が降り初めました。それで

も十時になると、もうRちやんが私を誘ひに寄つてくれました。私は花屋から買つて來ておいた、白百合の鉢を持つて、途中、子供達を誘ひ合ひ乍ら、十一時すぎてやつと御伺ひしました。

もう先客が二三人來てゐるらしく、笑聲が杉垣の外までもれてました。みんなが門の外から玄關に馳け込みますと、奥から、ママさんも祖母さんも、Kちやんも、『お客があるからハイカラにした』妹のYちやんも、それから先客のSさんTちやんも、大騒ぎで出迎へて下さいました。

氣早の子供達は玄關に上らぬうちに、思ひ思ひの贈物をKちやんに渡しました。

『なんてK子は嬉しいんでせう』

と贈物を兩手に持つて、Kちやんは大ニコニコ。

Mちやんの贈り物は、自分の持物の中から選んだ一冊の繪本、Rちやんは千代紙、M男さんは先日お父さんから頂いたと毎日大事に頸にかけてゐた、ピンクの毛糸の紐のついたニッケルの小さい鉛筆、Sさんは、おもちやの繪のついた小さいノート、其他それ〴〵にふさはしい愛の籠つた贈物でした

いつも子供達の誕生日には、繪を描いて贈つたり、色紙でお人形を作つて贈つたりしてゐますので、今日のよろこばしい日の爲めに、前からそれ〴〵樂しい贈物を考へてゐたのでありませう。

間もなく食卓が用意されて、小さい九人のお客さん達が座りました。白いテーブルク

ロースの上に並んだその日の献立は、――のりまき、十六豆の甘煮、卵の厚燒、白いかまぼこ、蓬蓮草のおしたし――美しい彩が先づ子供の目をよろこばせました。丁度夜會から歸つてらしたパパさんが、お驕りして下すつてみんな樂しい食事を初めました。

誰れもかれもが驚くほど大食でした。それはその筈です。子供達の大好きなをばさんが心を籠めて作つて下すつたのですもの。どれもこれも大好きなものばかりでした。

食後はパパさんとYちやん（四ッの妹さん）の合唱、みんなのダンス、蓄音器、ピアノと順序もなく次々に出ました。しまひにはすつかりのお人形やお玩具箱まで取出して大騷ぎ、此處でも、遺憾なく兒童の村式を發揮し、祖母さんは、とう／＼お逆せになつてお炬燵の部屋に避難されました。

何時迄たつても歸らふとは申しません。やつと賴んで四時にみんな伴はれておいとましました。

歸りますとき、Kちやんの大事な大事な千代紙――數日前祖母さんから贈られると約束されてからは、嬉し過ぎて眠れなかつたといふほどの千代紙――をお土產に分けて頂きました。

軍隊に行つてらつしやるKちやんの伯父さんからも、やさしいお祝の端書が届きました。愛に惠まれたKちやんの幸を心から嬉しく思ひました。

私は、今、机に向つて今日の思ひ出を認めつゝ、Kちやんの上にいつまでも絕えぬ惠みのあります樣にと心から祈つて居ります。

（Kちやんの七才の誕生日に）



保險勸誘員が提出した要求

山口敏子

一

三月中旬、當會社外交員一同が結束してつぎのやうな條項を掲げて社長並に重役に嘆願をしました。

(一)日曜、祭日及び夜襲(夜勤)は各自任意にいたされたきこと。

(二)ボーナスより一割の積立金を差引かゝることを廢されたきこと。

(三)毎月の責任額を一定されたきこと

(四)女子には女子部長を配して、私たちに進級の途を開かれたきこと。

(五)私たちが安んじて職務に服し得るやうにして頂きたきこと。

(六)常外交員一同が友情を温むるために毎月一回の茶話會を開くことを許されたきこと。

(七)集金の方法を今少し改善いたされたきこと。

以上

この他にまだ〳〵書きたいことは限りなくありましたが、何しろかうしたことは吾々にとつても初めての試みなので、取敢へず差詰つたものと、最も根本的なものとだけに止めました。

これから順次この内容の説明を申述べませう。

二

第一の問題は、その各部を擔當する部長相互の(會社の内が略拾名位宛に、三部に分立して成蹟を競ふてゐる)競爭と、他の會社に對するより強い競爭から、入社當時の約を破つて、かうした弊風を呼び起したものでありますが、これ等の人々の巧利

の犧牲とされる吾々にとつては堪えられない苦痛であります。殊に、これ等外交員の八割に近い既婚者は、か弱い身に際限のない家庭勞働の重荷を脊負つて喘ぎつゝ働いてゐるにもかゝはらず、冷酷な奴隷監　者は、自分の地位の向上のためには、思ふぞんぶんの鞭を吾々の上に加へてゐるます。私はしば〳〵彼等に言ひました、『部長さん、どうか貴方の妻君を、或は妹を使ふ心持ちで私だちを使つて下さい。偶の日曜日には、あなた方は奥さんや子供の手を引いて三越や、帝劇等にお遊びになりますが、女中のない私たちの家庭では、一週の間に溜めた洗濯物や片付け物が山とあるのですから――』しかし男子部長にはそんなことは馬耳東風で、夜勤をすらも强制するのでした。私たちが夜休息するのも、食事を攝るのもみな明日の活動のためにするのであつて、休むことは働く者の權利でなければなりません。休息のない勞働なんて、そんな無暴なことはありません殊に家庭を持つ婦人や、うら若い娘が、多勢保險の募集に夜間歩き廻ることは、どう考へても問題たらざるを得ません。それも各人のその時の都合でするのはいゝとしても、これを强制する乱暴には默する事が出來ませんでした。

第二は昨年の暮のボーナスで皆初めて知つて驚いたことで、毎月の俸給から一割を（五拾圓の中から五圓宛）引かれることすら、吾々にとつて苦しいことであるのに、更にまたボーナスから一割を引かれることは、殊にボーナスから積立金を引くなざゝいふことは何處の會社でも例のないことであり、それにこのボーナスも一度に渡すのではなくて、暮れの卅日と一月の末

とに分けて受け取つたのでした一例を示せば私は、入社後三ヶ月に約六萬の契約高に對して五拾貳圓のボーナスでしたが、內二拾五圓を暮れに、一月末に五圓の積立金を引いて貳拾貳圓受取りました、で一月の末は拾圓の積立金をさせられた譯けであります。大抵何處の會社でも、積立金はその俸給の百の十位いのものであるのですが、此處では馘首が頻繁に行はれるので、解雇手當を出さない代りに、その積立金を退社後三四ヶ月後或は六ヶ月後位ひに拂ひ渡すことにしてあるので。

最もこの俸給より一割の積立金控除のことは、入社の時直に交渉しましたが、これは我社の不變の社規であるから絶對に許すことは出來ぬ、若しこれを服せないなら、社員として採用することは出來ぬ、と、一蹴せられた經驗を持つので、このことは持ち出しませんでした。

三

第三の責任額に就いては、入社の時、重役自身が五拾圓の俸給に對して七千五百圓はどうしても契約して貰はねば算盤が引合ぬから、そのつもりでやつて欲しいといふことであつたのですが、その後これが、一万となり、一萬五千となり、二萬となり、三万となり三万七千となり四万となり――際限がなくなりて終ひました。そも／＼五拾圓の俸給に對して七千五百圓といふ責任額は、會社がチャント算盤をとつて割出した責任額であつて、これだけとれば會社には相當の利益があるのです。それにも拘らず、俸給は六ヶ月經ても一年經ても同じ（年二期の昇給と約束しながら履行しない）であるのに、責任額だけは無暗に引き上げられるのは合点が行かない。

もつとも、これは吾々女子社員にも大きな責任があるのです。それは、吾々が會社のオダテにうま／＼と乘せられて、婦人外交員お互ひ同志が競爭して成績を擧げたことです。此處に至つて會社は女子社員の驚くべき實力と薄馬鹿なことをチヤント見て終つた。從來大學出身の男子社員を七拾圓で使つて居たのを殆んど廢して、全部女子に代へたことは、このためであります

吾々がハッキリと自分の地位を自覺し、會社の云ふこと、やることを冷靜に批判するの明があつたら、初めからこんなへマはやらなかつたでせう。これは全く今日の職業婦人共通の一大欠点でありますまいか。

『國民が、すべて保險の大精神を理解し、助け合ふと云ふ慈悲の心に、その血潮が湧き、愛の心に、その胸が燃えたならば、あこがれの、彌陀の淨土が、あこがれの神の國がそのまゝ此世に出現するのであります』――これは會社の宣傳パンフレツト中の數行でありますが、吾々外交員は詞を正直に受け入れて、吾々外交員は愛の使徒として、衆生を濟度するの大決心を以つて、會社の酷使や、薄給に甘んじて勉勵すべきでありませうか會社は私達にさうせよと命じます。しかし、私達は今日の社會に於いて營まれる生命保險事業が、しかく眞面目な、無垢なものであるかどうかを一應檢討してみなくてはなりません。

現在我國には四十四の民間生命保險會社がありますが、眞に相互扶助の精神を實現してゐるものは、一つもございません。それは會社そのものが、そんなことを目的として經營してゐるのではなく、唯ひたすらに營利を目的としてゐるからであります營利を目的としない保險會社の

創立は無いのであります。しかし。加入を勸めるにあたつて、我社は營利を目的として創立したものであつて、あなたは數十年間無利息で以つて數千圓を我社に利用させなさいとは云はれない。保險會社位ボロイもうけはめつたにありません。人の褌で勝つて甘い汁を吸ふのですとは云はれないのです。

眞質(ほんしつ)に今の世の中の經濟のからくりを知つてゐるものは、決してこれ等の保險には加入しない。試みに我社の重役や、株主や社員の大部分は、そして世の富豪は決して加入してゐない。――それは損だからであります亦實際いかなる變事に逢つても生活の安定ある者にとつては、必要がないからであります。ところが中產階級以下になると、大いにその必要があるのです。一朝主人にでも死なれたら、多くの子供を連れて忽ち途方に暮れねばならぬ人が加入するのですが、これまた全くの赤貧者は保險料を掛けることが出來ないので加入出來ない。結局、中產階級から無產階級の大部分が不時の恐慌に――それも儼密な診査の上で最健康者のみが加入するのであるから、全く千に一つの死に對して、而かも、無利息以上に損な金を、衣食住を節約して苦しい掛金をつゞけるのです。會社は何十年引き出しの無い金を安心して利殖し、重役、株主が腹をいつぱい肥らするのです。

現在參千圓の金は裕(ゆう)に四、五人の家族を入るゝ一戸を建つることが出來る。しかし二十五年の先きで參千圓の金は今日の千圓の價値もなくなるでありませう。富める者は搾ることを飽かず、貧しきものは絕えず搾られるのが、資本主義社會の原則であります。

加入者が拂込んだ金の使ひみちに就いては、加入者は發言權が無い。重役、(最も多く株を持つてるもの)が自由にする、そして萬が一にも誤つて破產するやうなことがあれば、損をするものは加入者全体で、重役や株主は唯儲け損つただけで損はしない。死亡者があつても、會社が保險料を支拂ふのではなく他の健康な全加入者が支拂ふことになるのであります。

四

第四は男子部長排斥から起つもので、第一の無理解から生ずる酷使に憤慨したものであります。且つ望んで得られないことではありますが、一人女子部長拔擢の先例があるに拘らず、以來、昇級の資格あるものをも昇級せしめず、男子外交員の捨場に困つたのと、女子社員を小區分し、各分裂させて監督を嚴にして側目をふらせまいとしたので、前途に何等の希望を持ち得ない吾々は働き甲斐がなく、亦吾々の人格を無視して、必要のない監督をすることの不當を鳴らしたのでした。

面白いことには、拔群の成績者は、その成績あまりに優秀であるために部長に進級出來ないといふをかしい現像を招來しました。即ち部長は責任額が無いので、優秀者を部長としては、會社は損であるので、何時でも平社員として働かせようとするのです。これも間の拔けた拔群者の幾分罪ではないかと思はれます。

第五は、人道上の問題として重要なものです。私たち職業婦人は、遊び半分や醉興で職業に就いて居るものではなく、生きんがために、食はんがために働いて居るのでありますが、會社が吾々姉妹の首を切ることを、全るで當然なことのやうに、每



この美人の足に——十五萬圓の保險
（東洋見物に來た紐育のダンサー・ヒユ　孃夫人）

月顔を見せなくなる友人の數は驚くほどあります。タイプで打つた退職願ひが會計係のところには山と積まれてあつて、成蹟不良なものは、無理にそれに署名捺印せしめられるのです。勿論解雇手當不拂ひの防禦線であります。そして一方には一月置き毎に新社員を多數繰り入れるので私たちはオチ／＼と働くことも出來ない。常に絶えず馘首の白刄で脅されゐるのです俸給によつて生活する私たちにとつて、馘首は、私たちに餓死せよといふ苦るしいものであります。かうして苛酷な使役にも、恐しい脅威に對しても、私たちは唯個人々々で默々と慓えてゐるのみで、何等防衛の武器も力も持ちません。會社が巧みに各社員の間の連絡を邪魔して居るのと、どうしたら、せめて消極的防衛でも出來るか、といふことをみんな未だ、知らないからであります。空手の吾々がこの强敵の魔

手を逃れ、進んで苛酷な勞働條件を改善するには唯團結による他には武器はありません。

これは單に吾々自身の問題のみならず、全職業婦人のためにそして將來職業を以て立つ世の多くの婦人のためにも、是非とも必要な機關であり、同時に武器であります。弱い私たちはこの團結によつて、互ひに扶け合ひ、導き合ひつゝ、すべて一切のものを正しく視、且つ批判するの力を養ひ、地位を向上し、以つて人類の進化に貢獻するだけの聰明にして勇敢な婦人とならなければなりません。長い勞働と、低い賃銀とは、私たちの心身を極度に困憊させて、向上の光明を打ち消して終ひます。吾々は烈しい壓迫と脅威に對抗して、自分をまもる方法を講じ向上の途を開拓するために、一日も早く職業婦人全体が、一人も殘りなく手をとり合つて、強固な組織と訓練の下に團結しなければなりません。

五

第六は前記の團結を促すために必要を感ずるものでありますが、特にこの會社では、社員の競爭心をあふるために、各小さく分裂させるように仕組んでありますので、何にも知らない姉妹たちは、共通立場にある友人を踏み落しても、自分がよい成績を擧げて、社長や、重役から認めて貰ふとするのに狂奔して居ります。その結果は責任額の引上げとなり、勞働條件の低下となるのであります。そして仲よくすべき姉妹互ひが嫉視反目し合ふのは、滑稽といふよりも寧ろ憐れに情けない氣がしますそれは無智卑屈そのものゝ表現ではありませんか。私たちがこの無智から眞に解き放たれるために、茶話會をして有意義な團結の第一歩としたいと思ふので

ござゐます。

第七は、集金人の條件改善のためのもので、別に賴まれた譯けではありませんが、少數の、而かも同じ立場にあるこれ等の人に代つて一緒に嘆願したのでしたこの人々は日給制で、最初壹圓であつたのが今のところ壹圓三拾錢となつたのですが、一人前の男子が一日壹圓參拾錢で、どうして妻子を養つて行けませう勿論その妻も娘も息子も、みんな共稼ぎでヤット生活を凌いでゐるのですが、それだからといつて、待遇を改善しなくてよいといふ理由にはなりません。私たちの全部も、共稼ぎであり、獨立の生計者であるのです。これは深刻な生活難が、次第々々に擴く中産階級の中にまでも押しよせて行きつゝある證據で小ブルジョア的幻影に捕はれて居た中産階級や無産智識級が、漸く現實の苦さに常面して、昨日までの虛僞な見榮坊を振ひ落し、大膽に生活苦を叫ぶやうになつて來ました。

六

一体に職業婦人は肉体的勞働婦人に比べて、皆んな小ブルジョア的理想を抱いて居り、その心理もまた小ブルジョア的であります。それは自分自身無産者であり、勞働者であるのに、勞働者としての意識を持たず、女工よりは、自分たちは別の優れた人間でもあるかの如く考へてゐることです。何んといふ潛越な、そして無智もこゝまで徹底すると憤怒よりも、一緒に泣きたくなつて終ひます。これまで低能に、これまでに盲目に女を押込めた社會に向つて、より强い憤怒りと憎惡を感ぜずにはゐられません。

馴れない者は狂氣しさうな騷音と、息づまるような塵埃の渦卷く工場に働く多くの姉妹たち

は、うら若い身を病に蝕まれつヽ人間が生きてゆく上に最も大切な最も必要なものを生産してゐるのです。職業婦人の仕事は、資本家が多くの人を犠牲として自らの懐を肥やすためにする仕事を、代つてやつてゐるのであることを知らねばなりません。

私たちは婦人としても、勞働者としても、共通の立場にある勞働婦人と、同じく提携して進むべきであつて、決してこれをケイベツすべきではありません

兎に角、まがりなりにもこれだけの提案をするまでに外交員一同が動いたことは、やがて職業婦人が團結し、組織ある運動にも進むことが出來るものであると云ふ事を示したといふことが出來ます。

婦人に團結と組織的行動は絶對に不可能といはれた十數年の昔を憶ふて、轉た今昔の感に堪えません。婦人が社會科學の研究に志し、團結と組織的運動によつて、單なる婦人運動の域を脫し、人類のために新しき社會を建設する協働者たらんことを希ふにまで目覺しつヽあることは、急速に人類の夜明けが近づきつヽあることを思はせます。吾々婦人も、勇敢に光りを掲げて進む時が來ました。巧妙な資本主義のからくりを探り、吾々無產勞働婦人の、その爲さねばならぬ重大な歷史的使命を自覺し遂行しなければなりません。

× × × × × × × × × ×

七年苦役ののちを 誰か誓ひませう

求婚した奥田辨護士に宛て 獄中で認めた放火尼舜海の返事

——私の苦しい半生の經驗は私をして女に歸ることを非常に恐怖せしめてをります。あなた樣の御同情に對してはたゞたゞ感謝の外なく……　七年後のことお約束が出來ませうか。その間にどんな變化がお互ひの心身の上に起るかも知れませぬ。……私はこの際何もあなた樣にお誓ひせずに全てを自然にうちまかせて謙讓な氣持で刑に服しつゝ深い〱内省の底に沈みませう。……私のやうな過去を持つてゐる者はこのまゝ自分一個の幸福な生活に入るよりも罪業に泣く可憐な人達と共に人間苦のどん底に沈んで幾分でもそれらの人の友となり得たらと思ひます，

春さき はふけの多くなる時 ゴシ〱搔いてはいけない

◇三須裕氏談

春先きになると頭がかゆくなるので誰でも手荒に搔きますが、これではあとからあとから新しいふけが出來るばかりです。頭髮香水を毛穴に塗りつけ、更に使ひなれた油を毛の地肌につけてよくこするとふけがおちて快くなります。

少女九人が 生地獄の最期

茨城縣久慈郡西小澤村常陸製糸會社の作業場より發火し、二階に寢てゐた女工四十余名は逃げ場を失ひさながら生地獄の如く　遂に九名は燒死しその他火傷、負傷をしたものの少なからず、大混亂を呈してゐる。

女車掌はやめ乎

電車に女車掌が出來て、男の車掌の間に大恐慌を來してゐる矢先、やつぱり女では敏捗にやれぬ、折角慣れた頃、結婚して辭める事にならう、といふので新募集は當分中止の由

春さきの流行

三四年以來くすんだ落ついた色が喜ばれてゐましたが今年はパラソルから着物や、エリ、下駄の鼻緒に至るまで明るくて派　なものが流行

女子大學に成人講座

誰でも入れる

目白女大學櫻楓會では成人教育婦人講座を四月二十二日より初め、十八才より五十才迄の婦人のために、毎週水土曜の夜講義を開くことになつた。

職業婦人界通信

◇女の小學校長　山梨縣下に今度女の小學校々長三人を任命した

○

◇女教員の産前産後の休養　東京府小學校令施行規則改正の結果、女教員は産前二週、産後六週間の休養を認められるに至つた。これで東京府が最長期をとつて優遇の先例をとつたわけ

○

◇陸軍に女事務員　大坂聯隊司令部では、臨時に採用した女事務員の成績がよいので引續き採用

○

◇ガイドの學校　四谷區片町模範女學院では　度婦人ガイド養成所を開いて、一ヶ年修業で、會話や速記を主としたガイド（案内人）を養成

○

◇新しい看護婦會　本所

東京日日新聞に『婦人と勞働』が筆力をうけ、その原稿の執筆者石川清子さんがケイシ廳に拘留されてゐるといふ大ベラボーな嘘の事が出てゐた。何しろ、それに就いての奥むめお談までゴテイネイにのつてゐるのだから、人がマにうけるのも無理はないのだけれど夜中の二時頃寢就いたばかりの處を叩き起こされて、寢耳に水のことを聞かされて、打消しておいたのに新聞記事にされたりして、實サイ新聞記者の無責任にはあきれる

メーデーに初めて 婦人の一隊

◇——女車掌が戰線へ

東京市電自治會の第二回大會は四月二十四日に開かれるので、目下その準備で多忙中ですが、今度の大會で新しく婦人部が出來ることになつてゐます。婦人部は電車の車掌五十人と乘合自動車の車掌七十人が團結する筈でおひおひは婦人の自治的な組合にする目ろみです。五月一日のメーデーにも今度はじめて女車掌の一團が婦人勞働者の代表者として、勤務に差支ない限り參加して大いに氣勢をあげやうとしてゐます

思ひが叶つて『組合結婚』の式

——農民運動の三宅さんとのぶ子さん——

無產者の解放、農民運動の急先鋒として働いてゐる三宅正一(三二)さんの雄辯振りに、戀の擒となつて名門も資產も親をも捨てゝ、男と共に甲府の片田舍に姿を消して戀の勝利を歌つた女——のぶ子さんは、今度いよいよ親たちの承諾をえて『組合婚』の式をあげ天下晴れて勞働運動につくす由

貞操は女の墜ちゆく 開かれ易い 地獄の扉

◇屈辱的婦人の地位を歎いた『光に叛く』——◇

長篇小說『光に叛く』を自費出版した安部よりみさんは『私によく似た心を持つたたゞ一人でもが、繰返してこの本を讀んで呉れたらと思ひます。私はいゝ小說とは、讀む人の心に觸れて多くの感激を與へるものだと思つてゐるものです』と。

婦人界消息

○荻原眞子氏　今度帝國大學の食堂文房具經營主任になつた。

○坂本眞琴氏　婦選運動の對議會運動も一段落がついたので又本職の絞染講習に多忙。

○千葉ちえ子氏　今度東洋生命保險會社に入る

柳島附近を中心とする產婆看護婦の有志は、會長に頭をはねられ・恐れのない全く自治的な團体を組織する準備中

○◆新設の營養學校　營養研究所の佐伯博士　芝區金杉川口町二〇に營養學校を建てた。家庭營養科は主婦のために、實際科は會社、工場、寄宿舍、病院等に勤務する婦人のために、智識と技術を與へる

○◆處女會　處女會中央部では、今度各地方支部と聯絡をとつて新活動に入るべく協議中のよし

○◆九大法學部に二婦人　調すま子、織戶登代子の兩氏は九大法學部本科生としての入學試驗にパスした

○◆東北大學理學部に三婦人　光雲枝、石原文代、高木ふみの三氏は理學部に入學

ラヂオ文明

二十年まへ、誰か新婚旅行に飛行機で旅をするといふことを考へたであらうか。ラヂオ文明の今日では無線電話機一つあれば、居ながらにして各地の出来事を知り、有名な人の音楽を聞き、講演を聞く事が出来る。先日も、市場で買物をしてゐる時丁度ラヂオの放送時間で『今日は花見日和で市中は非常な人出である。品川ステーションの乗降客は午前十一時までに、三万・千人に達しました——』と、市中の混雑してゐる模様をいろいろと傳へるのであつた



毎夕、近所のある薬種屋の店頭は、セヴィラの理髪師やトラジイアタや、獨唱や、追分や、尺八などのラヂオ音楽を楽しむための人で殺倒する。

文化住宅の、家庭の電氣化のと宣傳せられてゐたのも、もう大分古い。それにしても大多数の女の生活は、今どうであらう。栓一つひねれば用が足りる電熱器をショウウヰンドの陳列の中に横目で見すごして、自分は相變らず、一把・六錢の薪に火をたきつけて、煤だらけになつて御飯を炊き、湯を湧かさねばならぬ。自動車は早いと知つても、たかだか、往来の道ばたで泥々のトバッチリをはねられる位のもの、用達しは一里でも二里でも相變らずテクらればならぬのである。

商賣に洗濯をする洗濯屋といふものがあり乍ら、五十錢　一圓を惜んでは、毛布やワイシャツに至るまで、忙しい仕事の片ひまを盗んで洗はねばならぬ。女の前に、家庭生活の單純化を説くものは誰か

文化住宅も、生活の改善も、文明も、それが澤山の金子をかけなくてはわれわれの生活に持つて来られないものである限り、大多数の女の生活は、いつまでも今の假非文明、不便のまゝにつゞいて、つひに女は家事労働の奴隷として、その一生をやみに埋れてしまはねばならないのである。

『自作農の處へお嫁にゆくわよ』つて？

——農村婦人に與ふ——

山崎嶮路

私は、今まあなたを、村ぢうで一番びんぼうな田も畠も自分の手に持つて居ない小作人の娘で、現在紡績工場で、朝の六時から晩の六時まで棉屑だらけになつて働らいて居る女工さんだとして、あなたに話しかけてみませう。

『あなたは一体何故、そうして毎日工場の中で機械に追いまくられて働らかなければならないんですか』

私がこう問ひかけたらば、きつとあなたは、

『それは家がびんぼうだからだわ』と、

即座に答えて下さるでせう。では私が又聞いて見ませうか。

『ではあなたの家の人達は皆んな、あなたとちがつて朝から晩まで、働らかずに遊んで居りますの』

と、けど、あなたはこれには首を横に振つて、

『遊そんで居る處ではない。朝から晩まで眞黑に

なつて、土を掘り返えしたり、草をむしつたりして働らいて居るんですよ』つて。けれども私はあなたの答えが終らないうちに問ひ返えしますよ。

『昔つから、稼ぐに追ひつく貧乏なし、と言ふことわざがあるぢやありませんか。それが何んだつて、貴女の家の父さんや母さんが、朝から晩まで眞黒になつて働らいて稼ぐのに、それでいて貧乏して、あなたをまで工場へぶち込んで稼がして置くんですか』と。あなたは一寸この私の問に答えが出來そうで、のどまで來て居るらしいけど、はつきりと口え出て來ない樣な氣分でせう。で私は折り重ねて聞いて見ますよ。

『ちつとも働らきも稼ぎもしないで居る地主さんの家の人逹は、一体何故に、あなたの家と反對に美しい着物を着たり、うまさうな白い御飯を食べたり、又娘さんが靴や洋服をつけて、町の女學校え通つて居られるですか』と。けどあなたはこれにはすぐに『それは當り前えだわ、何故つて、田や畠や山林をうんと持つて居るんだもの』と答えてくれるにちがいない。ぢやあ、私がそれを言つて見ますすと、

『あなたの家には田も畠も何にも無くつて、貧乏して居るその代り、地主さんの所では田と畠を持つて居るから、財産の力らで遊んで喰つて居られる。貴女のお父さんの樣に畠を自分で持つて居ない者は、地主さん所からそれを貸してもらつて耕作する、それだから毎日毎日一日も休まずに働いて居るんで、地主さんは田や畑を小作人に貸してしまつて、そのかはりその小作米で、喰つたり着たりして居られるのだから別に稼がなくてもいゝと言ふんですね。ぢやあ稼ぐに追ひつく貧乏なしなんて格言は、嘘つぱちだと言ふことが言へるわ

けですね。何故この格言が嘘つぱちになつちまつたんでせう。さあそれが問題ですよ。あなたには解かりますか』

　私は貴女の御答えを待ちませう。けどあなたは『出そうで出て來ない』と頭をよつぽどひねつた末に答えるにきまつてゐる。出そうで出ない、あゝそうですか、ぢやあ私が代つて言つて見ますよ『今の世の中ではお金でも、田地でも何んでもよい、から一つでも人よりたくさん持つて居て、そのお金だの、田地なぞをそれ等を持つてゐない人達に貸しつけて、その利子や、小作米を取り立てゝ、[illegible]を[illegible]からなのです。つまり、お金を持つて居る人は、その御[illegible]をいろんな人や、いろんな會社なぞ、丁度あなたの入つて居るこの紡績會社なぞえもです、株券と云ふものにして貸し込んだり、又田を持つておる人は、それを持たない人に貸して手ん手に、お金の縄や、田地の縄、[illegible]らなのです。だからこのお金の縄や、田地の縄をふ[illegible]、貴女のお父さんの様な小作人や、あなたの様な會社で働らいて居る人達は、貧乏に追いつかれどうして居るんです。まあちよつと考えて御らんなさい。地主さんなぞは、ちつとも稼ぎもしないくせに、毎月役場え鼻を高くして税金を納めたり、村のお寺え寄進したりする。



又町の小學校え御金を寄附したりするでせう、そい[illegible]小作人の、血と汗の塊りである小作米が[illegible]たと言ふことが言へるのです。それからまだあるでせう。貴女が工場で働らいて居る間、地主さん所の娘は、あなたと反對に、うつくしい着物を着たり黑い光つた靴をはいたりして、町の女學校で、歌を唄ふ、手を握り合つて遊戯をやつて、キヤツキヤツとはね廻る。そんな[illegible]お三年に一度位ゴツゴツした木棉の着物を造つて、その余分をお父さんの畑小作の足しに送つた金が地主[illegible]なぞも』

どうですかあなた、私が今云つたことに賛成出來ませんか。小作人は一生田や畑といふ繩で締[illegible]

してしまふんだと云ふこと、このことが嘘だと思ひますか。あなたはきつと、

『私の云い度いと思つたことだつた』

と直に答えてくれることゝ思ひます。けど貴女はまだ思ふかもしれない。どんなことを。それは、

『小作人だつて、一生やつて居ないつたつて、そのうちには少しは財産がふえて工面が良くなつて行くかも知れないわ』と、はゝあ一寸思えそうなことですね、ぢやお問ふて見ませうか、

『田や畑は毎年そんなに増えては行かないけど、人間は毎年どしどし増えて行くし、田の値段はそれにまして一年一年と上つて行く筈です、ところが、一年づゝ少しばかり積み重ねてゆく御金は、ほんの少しでせう、それも二年前の十圓は二年後の十圓より價値が下つて行くでせう、それは何かが高くなつて行きますからね、そこでゞす、毎年上つて行くものに、毎年下つてゆくものとでは何年經つても中々そんなに一時にその金で地主さんになる程なんぞ、土地を買えつこは有りやしないでせう。で結局、苦るしみ通しでしまふ具合になつちまふんです、第一、小作人の人達がそんな金をごく少しづゝでも積んでゆけますか、あなたの弟や、妹はたくさんにあつて、まだ小學校え上つて居ない小さなものも居る筈ではないですかそれだのに、もうあなたのお父さんの額には太い皮の波が寄つてゐますし、頭の毛はだいぶ白くなつて來たやうではないですか。それで居て、ほんの少しの金でもが積み重ねられますか、積み重ねるどころか、かえつてピイピイの風車が鳴つてはゐないんですか。まあ小作人が地主になるなんて事は、恐らく、夢の様な理想でせうねえ、貴女はどう思いますか』しかしあなたはこの無遠慮な私

の間にムットして、

『私だつて自作農の所えお嫁にでも行ければ、そんなに苦るしまなくつたつていゝわよ』と唇を嚙み〆め乍ら私に反抗するやうに言ふかもしれない。

　それでは私は、今度あなたが、工場から借りた前借り金をすつかりと返えして、それから强請貯金を下げて貰つて、いよ〳〵工場の年期を明かして小作人の父の所え歸つて、これから運がよく自作農の所えお嫁さんに入ることが出來たと言ふことにして話を更えてみませう。勿論それには、貴女があなたの御友達のやうに、男の職工さんと工場で好い仲になつてしまつて、遠くの會社え飛びつちよをして、そこで二人共毎日々々、揃つて工場え通ひ、兒を孕んだ時でも、產み月半ばまでも、それから產んでしまふとすぐ肥立たない內に、もう工場の乳兒預所へ赤ん坊を放りこんで置いて、瘦こけた蒼い顏を綿屑の中えフラフラさせたりする悲慘な身の上を操り返えして居る人達とは別なものとして話しませうね。あゝまだありますなあ、あの肺病を寄宿の中で背負ひこんで歸えつて來たなり、半年ばかり病みほうけて、骨ばつかりになつて、眼をギヨロギヨロさせて死んでしまつたあのお友達や、その外にも、あの男工さんから惡るい病氣をかけられて、髮の毛がゾクゾクに拔けてしまつた人のやうな不品行をしなかつた、それは極く働らき者で、外出なんぞもしないし、强請貯金に、虫を入れたりなぞもしなかつた女工さんだつたとして話をして見ませう。

『あなたは先づ舅や姑つてものが、貴女が小作人の家から來たんだと云ふことや、女工をやつて居たんだと言ふことの前に、隨分と變てこに當るやうな、威張る樣なことをすると思ひませんか』

しかし貴女は温順に、
『だつてそれは仕方がないもの』と言ふかも知れない、ぢやあ私が問ふて見ますかね。
『貴女は小作人の家よりもかへつて、自作農の家の方が内々は苦しいやうだ、とは思いませんか』
しかしあなたは、まだ身代を持たないからと云ふ理田でそれを答えてくれないかも知れない。それでは私が話して見ませうか。
『今日本では、一ヶ年に全國を合計して、八千戸から一万戸足らず位の自作農が皆んな小作人に落つこちてしまふんです。それは日本の内務省などの調らべたのによるとですよ。その一万戸づゝの自作農が何故に小作人に落つこちるかと云ふと、それはこうなんです。一体に、肥料やら種子籾代やら手間とか公課負担とか地租、なぞの様々な費用を差し引くと、かえつて作つた田の全收入よりも費用の方が多いと云ふことが原因なんです。そのくせ肥料代とか、納税なんぞはピンピンと取り立てられるし、村や町の費用や寄附金なぞも、家格相當に出さなければならぬし、子供だつて高等小學か農業學校の一年もやらせる、と云ふ風にもなるとすると、どうしても、銀行からでも金を借りる様になるのです。しかし常時はどうにかこうにかやつて行けるとして、一寸誰れかが病氣でもしたとか、又は娘を嫁にやるんだなんぞと云ふ事があると、どうしても御金が必要になつてしまふのです。そこで大切な田や畑を担保にして御金を借りる事になります。そして毎年高い利子をビシビシ銀行に取り立てられなければならないでせう。普通だつて足りなかつたんだから、それに利子まで、仕拂つて行かなければならないとなると、とてもやり切れないのも無理はないのです。さあそ

うなると今度はまた、無盡講とか、信用組合とか云ふものを利用して、少しの間息をつくと云ふことになる。そして、何んでも土地を手ばなさない様にと思ふから、一生懸命で、毎日／＼休みなしに働らいて、利子を拂ふ金や無盡講の掛金をこさねるんです。

そして自作農の人は、五反八反の土地の上に王様然としてがんばるためには、そら、人目につかない苦しいことがあるんですよ。だから五反百姓の王位を落さない様に、毎年足りない足りないと云ふところをうめ合せるために、自分達の生活の程度を下げることゝ、働らく時間を永くすることによつて、やつと息をするのです。まあこうして居られるうちは、まだよいんですけど、もう何にかひよつとして思いがけない物入りでもしたら、もうその穴は中々ふさがらないんです。そらそうでせう、自分の田で取る收入よりも、出費の方が多い位になつてしまふのに、様々な利子やら何にやらを取られ、役場納めなんぞで、税が持つて居るだけの田地に對して取り立てられるんですからそのくせ一寸人を頼んでも、一日にすぐ二圓だ、二圓三十錢だと云ふ賃金を仕拂はなければならんのだからね。それから又二男でもが分家なぞするとなる時には、又一軒家をかまえさして、田の二反歩に、畑の二反歩位分けてやるとすると、さあごうです、いよ／＼本家の方の耕作地が少なくなつたから、他の地主さんからでも、貸して貰はなければならなくなるでせう、もうこゝで、一軒の自作農が無くなつて二軒の小作農が出來ちまつたわけです。そして一方小作米を六割も地主さんにやつてしまつて、その殘りの大切な米を、時の相場と云ふ商人本位の波の上で、淚を流し乍ら難破さして

しまはなければならないのです。収入つぐのつたつて、割に合はなかつたつて、種々樣々の手前えどうすることも出來ないでせう、そして町の米屋なんぞは、大方肥料屋を兼ねて居るのですから、肥料でうんと利益を上げて、又米で利益を上げるんです、まあ体のよい、百性は利益を搾られる油菜の種子見た樣なものなんです。つまり早く云ふと賣る物は安く、買ふものは高いと云ふ事が、根本の原因で自作農は死んでしまふのです。だからまあ貴女がですね。小作人が田や畑の事で縮りつけられて苦しむから、今度は自作農に嫁入つて樂をしやうと思ふと、飛んだ勘定ちがいをしてしまふんです。一寸例を取つて云つて見ますと、小作人の苦るしみは、大地の上に寢て居る樣な苦しみなんです、それに引きかえて、自作農の苦るしみは途中へぶら下つて居ると云ふ具合の、極くかんだ



るい苦しみなのです。上になんぞもう自作地と云ふ重みにたえかねて上がれやしないし、そのくせ下に降ちまいとしてもがく生活の疲れで、手も足も動かなくなつてしまふ。そこへ行くとかえつて大地より下えは落ちないと云ふ安心がある爲め、割合に小な人の方が樂しいくらひなんです。

そしてどんなに身を落して働らいても、小作人なら世間が笑ひませんけど、そこは自作農と云ふ空證文の爲めに、隨分苦るしい血も吐く樣な思いをしなければならないのです。まあ小作人が餓死の病氣なら、自作農は血を下す赤痢病の樣なもんですね。だから御氣の毒だけど、貴女の考えも、所詮は小作農としての苦るしみを自作農としての苦にかえたのにすぎない。丁度それは、小作農の苦と云ふ黑ずんだ血痕を洗ふために、自作農の苦と云ふ鮮血をもつてするのになんのかはりはないのです』

どうですか、私はあなたの事について、心から心配して居るので、ついいろ〳〵と變てこな事を云つたりしてあなたに話かけて見ましたが、私の云ふことゝあなたの考えて居ることゝ大變にちがふとは御思ひにならないでせう。かうして百姓をやつて居る自〃農も、小〃農も皆んな今の世の中では苦るしんで居つて、いくら小學校の先生が、『田舍は樂しき所なり』と敎えても、又父や村の人達が若い男達に、『こゝ掘れワンワン』と云つて百性の鍬を握らせても、皆んな自分等の村を逃げ出して町や東京えおつぱらつてしまふと云ふことに氣がつくでせう。

△編輯室にて△

東京では、毎日花のたよりの賑かなこと、こゝ暫く電車がこみ合つて、外出に骨が折れます。

もう花は散りつくして、青葉の匂やかな土地もありませう。(私が、あと十日ばかりで旅する九州などは、さうではないのかしら)これから、ふつくらとした蕾なわつて、花ランマンと咲きそう處もあるでせう。とにかく、花のたよりは嬉しいものです。私のやうに、せわしい用達しの行き歸りに、あれもこれもと物を思ひ乍ら、ゆきずりにチラと花を見すごして驅けてゆくやうな人の姿を、花は、何と、あはれんでみてゐますことやら。

○

この四五月は、婦人界にいろ〳〵の催しがあつて注目すべきときです。十七日には女子學生聯盟の大會、十九日には婦人参政權獲得期成同盟會の大會があります。こんど陣容を新たにして、一層組織的に永續的な運動に入るために諸種打合せがある筈です。同じ日、政治研究會の大會があります(無產階級の)婦人もこれに参加して、いよいよ貧しい者の利福を增進する運動に就て、協議する筈です。

五月二十三日から全國女敎員の大會、一年々々と氣勢を添へて來てゐるので、今年あたり、どんなに意氣込んで行われるか、各方面から期待されてをります。

何しろ女敎員は、職業婦人の中での智識階級です。それに、家庭をもつてちやんと生活の中心を据えた人が多いのですから、いゝも悪いも、全て生きた問題に打つかつてゐる筈です。職業婦人解放運動の第一番のたゝかひが、このグループからまづ初められなくては噓だと、私はいつも思つてゐます。

○

雜誌の購讀者を御紹介下さる方々にあつくお禮を申し述べます。おかげ様で、私たちがしやうとしゐる仕事に共鳴して下さる友人を、餘程澤山に各地方に殖やすことが出來てゐます。どうぞまた、一人でも多くお紹介下さい。

(おく)

前納誌代

一部 二十五錢 郵稅五厘
半年分 郵稅共 一圓四十錢
一年分(郵稅共 二圓八十錢

送金法

誌代は必ず前金の事
送金は振替で願ひます
誌代の受取證は別に出しません。雜誌發送を以てこれに代へます

大正十四年四月三十日印刷納本
大正十四年五月一日發行

發行編輯兼印刷人 奥むめお
東京市外巣鴨町一〇一九

印刷所 香柏社印刷所
東京市外西巣鴨町六六〇
電話小石川五一八四番

發行所
東京市外巣鴨町一〇一九
職業婦人社
振替東京六四一六〇番

教育週報

五月中旬創刊＝爲藤五郎主幹（每週一回）

内容の一般

▽教育時事問題の報道、解説、評論▽教育界の人物評傳▽新人の印象▽學術新研究新調査の紹介▽海外教育事情の紹介▽教育運動記錄▽教育團體個人の消息▽全國教育界の美談、異事、珍聞、醜聞▽新刊書の忠實なる批評▽思想文藝▽就職紹介▽その他

定價

一部…八錢（税五厘づゝ）
四部…卅錢、約一ヶ月分）
十三部…一圓（約三ヶ月分）
二十六部…二圓、約六ヶ月分）
三十九部…三圓（約九ヶ月分）
五十二部…四圓（約一ヶ年分）

◆教育時代が來らんとして居る

その制度、組織、方法、精神、思想の總てに於て、日本の教育界は今大改案の必要に迫つて居る。そして、高等、專門、普通と言はず、男子、女子の別なく、あらゆる教育機關に亙つて、最早姑息なる塗換と修復と彌縫とを許さざるの場合に際會して居るが故に。

斯くて政治を論じ、社會を論じ、藝術宗教を論ずるに、教育を知らずしてその焦點に觸れること能はざるの情勢に迫つて居る。

◆明かに教育時代が來らんとして居る

教育週報は、この機運に棹さして生れ出づるものである。

「新聞より精確に、雜誌より迅速に」これわが教育週報の標語とする所、在來の新聞紙は、報道を專一にして評論と研究とを疎外し、雜誌はまた研究と思索に專らにして、事實と、事件と、問題の論斷に懶怠であつた。わが週報は、新聞と雜誌の中間を縫うて、しかも兩者の短を捨て長を取らんとするものである。

時報に、評論に、研究に、紹介に、炬火の如き正義の焰を振翳して、或時は全教育者の味方となつて、その良港となり、或時は教育界の照魔鏡となつて、其司直の府とならんとする。教育週報は、この使命の下に生れる。

發行所　東京西巣鴨町二四〇一　振替東京七一五九三番　教育週報社

大正十三年十一月二十二日第三種郵便物認可
大正十四年四月三十日印刷納本

婦人と勞動

第三卷第四號

【定價金二十五錢】